

ぼくは誰だったろう。どこで何をしていたのだろう。一思い出せない。

ただひとつ思い出せるのは、ぼくを乗せてどこかに運んでいく塩辛い水とぼくが、とてもなかよしだったということ。しょっぱい水の名前は・・・そう、海だ。

ぼくは今、水の泡のようにまるい。ガラスの浮き玉のように光っている。どうやらもう、人間ではなくなってしまったらしい。もしかしたら、川エビが脱皮するように人間の殻をぬいで、魂だけになってしまったのかもしれない。

群青の夜空から、星がひとつ、ふたつと流れては海に落ちていく。ぽちゃん、ぽちゃん。

そうか、ひょっとするとぼくは星だったのかも。うっかり海に落ちてしまい、帰り道を忘れた星！

大きな賢いクジラが歌っている。満月に向かって跳び上がって、歌っている。クジラの気持ちが、水を通してぼくに伝わってくる。旅立つ者に向けられた、祈りの歌だ。

でも、誰の旅立ち？

そうたずねようとした時、何かが海の奥底からすごい速さでせりあがってきた。滑るように、昔話にでてくる白い竜のように、うねりながら。得体のしれぬ生き物は、どんどんこちらに近づいてくる。もうだめだ、と目を閉じたのと、白いなめらかな渦がぼくをつつんだのが、一緒だった。

「わたしたちの兄弟よ、目を開けて。こわがらないで・・・」

それは葦の笛の音を幾重にも重ねたような、なつかしい声でぼくに語りかけた。しん、と静かな永遠の一秒を待って、ぼくはおそるおそる目をあけたー。

泡粒であるぼくは、いつしか銀河のように光る魚の群れに取り巻かれていた。白い竜のように見えたものは、何千何万という小さな魚が集まった姿だった。

魚の名前は思い出せない。けれど、ぼくと同じように透きとおっていて、なつかしい。クジラが祝っていたのは、もしかしたら彼らの旅立ちだったのかもしれない。

「私たちは、約束をしただろう、だから迎えにきた。イコウ、イッシュヨニ、イコウ・・・」

そう言われると確かに、ぼくには行くべき所があるはずだという気がしてきた。遠い記憶の彼方で取り交わされた約束があって、それが見えない糸を引くようにぼくらを呼んでいるのだと。

すると、すらりと体がのびて、僕は光る魚たちと同じ姿になった。魚たちは心得たようにぼくを乗せ、滑るように泳ぎはじめた。幾日も、幾晩もかけて。疲れも知らずに。

水平線から浮かんでは沈む太陽と月を、幾つも数えた。月はだんだんとやせていった。

そうして旅をつづけたある夜、長い長い沈黙の後で魚たちはぼくに告げた。

「ココダ、ココダ。私たちの約束は、ここで生まれたー」

途端にしょっぱい水が甘くなり、味が変わった。匂いも変わった。

辺りは暗くて、かすかに星あかりが射すだけだ。でもぼくにはわかった。ここがその場所なのだ、ぼくの魂が、いつも辿り着きたいと欲していた場所なのだ、と。

見えぬ手がぼくを引っばる力が、また強さを増した。

ぼくはよろこびにふるえながら、暗い流れを遡っていったー。